

藤本 では引き続きまして、平石先生のご報告に移ります。平石先生もこのプロジェクト創設当時のメンバーということで、現在は京都大学のこころの未来研究センターにご所属で、理系といますか人間心理学から契約についてのいろいろ polemisch な話をいつもいただいています。今日はいよいよご報告いただけるということで、非常に興味深くお伺いしたいと思います。

それでは、平石先生よろしく申し上げます。

平石 平石 (京都大学、進化心理学)

「人々は“契約”をどのように捉えるか——思考の認知心理学研究から——」

平石 平石です。ご紹介いただきましてありがとうございます。今日は、異種格闘技戦というかアウェイな感じで、実は結構緊張しております。(以下、パワーポイント使用)

私は今、こころの未来研究センターという、所に所属しております。このセンターは一昨年(2007)の4月に発足したばかりの新しいセンターで、あえて心理学と限定しないで「こころ」、つまりスピリットなども含めた、単なるマインドではなくて心理学以外、倫理学や宗教学のスタッフもいるという広い視点から「こころ」をとらえようという研究センターです。私自身のバックグラウンドとしては心理学で、専門としては進化心理学といたしまして、人間の心もまたダーウィンの意味での自然淘汰による進化の産物であるということを前提に心理学研究をしています。

今日、他の先生方のお話を伺っていて、進化心理学と皆さんの考えている親和性はあるなと思ったのですが、進化心理学の話をする、「それは本当に進化の産物なのか」とか、ややこしくなり、本来の目的である「契約」について考えるところに行き着かない恐れがあります。データとしてお見せするのは進化心理学の研究のものが中心になるのですが、今日はどちらかという心理学の視点から(お話しします)。契約シンポジウムなので「契約」とつけましたが、より具体的にはPならばQという条件文、ルールに関する人々の理解についていろいろな研究がありますので、それのご紹介をさせていただきます。そして、そうした研究が「契約」についての考え方、特に法学的な考え方にとどのようなインプリケーションを持つのかということ、むしろ皆さんに教えていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

発表のアウトラインです。思考(thinking)の研究というものが心理学では長らく行われています。そうした研究者のほぼ一致した結論として、人間の思考には心理学者がバイアスと呼ぶ歪みがあります。この歪みには、いろいろなコンテキスト(文脈)というものが影響することが知られています。その例を幾つか紹介します。そしてまた、こういう歪み方には個人差がある、人によって結構違う。結構という少し大げさですが、同じ文脈であっても、ある人はこういうふうを考えやすいし、ある人はこういうふうを考えやすいというバイアスがあるということも知られている。そうした研究を紹介したいと思います。そして、こうした心理学の知見がある中で、「正当」という言葉をどう使えばよいのか。ある契約が、公平だとか平等だとか正当だと言うことができるのかできないのかということについて、皆さまのご意見を伺えればと思います。法学についての非専門家として、いささかナイーブな質問を投げさせていただきます。

■ 思考のバイアス

思考に歪みがあるということの具体的な例としては、古典的な三段論法を皆さんに考えていただくとすごくよくわかると思います。「すべてのサルはバカルドである」「どの哺乳類もバカルドではない」というこの二つの条件があったときに、以下の五つのどれが正しい結論でしょうかというものです。「1. すべてのサルは哺乳類である」「2. あるサルは哺乳類でない」「3. どのサルも哺乳類でない」「4. どれもでない」「5. あるサルは哺乳類である」、さてどれが正しいでしょうか。

即答できる方はいますか。世の中には即答できる人もいますが、僕はできないタイプの人間です。それだから思考の研究をしているとも言えます。これは、まずすべてのサルはバカルドですから、バカルドという大きな集合の

中にサルという小集合が入っているということです。どの哺乳類もバカルドではない、つまり哺乳類という集合とバカルドという集合は重ならないわけですから、「どのサルも哺乳類でない」というのが正しい結論になります。ところが人間はそんなふうを考えることはなかなかできません。この場合に何がこの推論を妨げているかということ、それはサルだとか哺乳類という非常に具体的な単語です。サルは哺乳類だろうと皆さん考えてしまう。そういうものが恐らく邪魔をしているところもあります。これを「すべてのAはBである」「どのCもBではない」とかというふうに書くと、もっと推論は簡単になることもありますし、そうではないこともいろいろあります。

こういう三段論法の研究がいろいろと行われていて、非常に乱暴に言ってしまうと、一つの結論は、人間の脳みそはアリストテレスが考えたような規範論理学専用にはできていないということです。専用できていたら、こんな質問にはは、みんなすぐに答えられるはずなのにそうはいかないということです。

このように、人間はルールに関して、勘違いといえど勘違いですし、歪みといえど歪み、少なくとも規範論理学とは違った考え方をすることが知られています。そうした研究の中で一つ有名な心理学のタスク、課題という言い方を我々はしますけれども、ある質問があります。これは Wason Selection Task といひまして、ピーター・ウェイソン (Peter Wason) という人が考えついたものです。昨日 Google scholar で「Wason Selection Task」を検索してみたら 5000 件ぐらいひっかかって、つまりこの課題だけで 5000 本ぐらいは論文が書かれているものです、

この課題は、非常に単純なものです (可能ならば図を：パワポファイル添付)。最初に 4 枚のカードがあって、この 4 枚のカードはすべて 1 面にはアルファベット、1 面には数字が書いてあります。この 4 枚のカードについて、「カードの一面が “K” ならば、もう一方の面は “3” である」というルールがあるとされています。でも本当にこのルールが正しいかどうかはわかりません。ルールが正しいか間違っているか調べたいのですが、どのカードをめくって裏を調べる必要があるのでしょうか。最低限必要なカードを選んでください」というわけです。そんな面倒だから 4 枚全部めくってしまえというのは、なしということをお願いします。4 枚どうしてもめくる必要があるならめくってほしいけれども、とりあえず最低限必要なのはどれでしょうか。

時間があれば、皆さん一人一人指して答えてもらうところですが、そうもいかないもので、よくある回答をお示しします。「K はめくるでしょう、裏が 3 でないと困るからね。3 はめくるよね、3 の裏が K じゃないと困るじゃない」という回答が非常に多いことが知られています。

ところがこれは論理的に考えれば間違いです。なぜかということ、K はめくる必要があるのですが、3 の裏が仮に X だったとしても何の問題もありません。「X の裏が 3 ではない」というルールではないわけですから。必要があるのは、5 をめくって裏が K ではないかどうかを確認することです。5 の裏が K だったら「K の裏は 3 である」というのは間違いですから、ルールは間違っていたことになります。でも人間はそんなふうには考えられないらしいということです。

ところが、この問題をもっと具体的なものに変えると正答率がアップすることが知られています (ここも可能なら図を)。今度は、「これはお店に来ている 4 人の人物をあらわしていて、一方の面にはその人がいま何を飲んでいるか、もう一方の面にはその人が何歳であるかということが書いてあります。そういう 4 枚のカードですよ」と言います。そして、これはイギリスでやった調査なので、「お酒を飲むのならば、18 才以上でなければならない」という日本より少し緩めのルールが提示されるわけです。そして「この 4 人がルールを守っているかどうか調べるためにはどのカードをめくる必要がありますか」と聞くわけです。純粋に抽象的な論理のレベルまで落とせば、先ほどの問題と論理的な構造は全く同じです。ただ、この場合には多くの方がそれは酒を飲んでいる人を調べて 15 歳のやつを調べるでしょうと答えることができます。

ここで「酒を飲んでいる人」は、最初の例での「K」のカード、「15 歳」は、「5」のカードに相当しますので、つまりは論理的な正答がふえるということです。こういうものを文脈効果と我々は呼びます。

最初の例のような、標準 Wason 課題と言われている抽象的なルールのものだと論理的な正答率は非常に低い。大体 10% ぐらいです。多分今までの世界記録だろうと僕が思っているのが、東大の理系の 1、2 年生にやったときに 50% というのが出て、それをあちこちで披露すると、みんなに驚かれます。それでも 50%、半分です。「お酒を飲むのなら

ば」というタイプにしたときには、同じ東大の学生で 90% ぐらいの正答率まで上がります。そうではないところでとっても、10% と 40% ぐらいの差は出てきます。

なぜ論理的な正答率が上がるのかということについて、いろいろな研究がたくさん行われています。ごく初期には、みんなが「なじみ」あることについては論理的に考えることができるのではないかという話がありました。しかし、どうもそうではない。例えば「渋谷に行くならば、山手線を使う」というルールでは正答率は上がりません。いろいろな理論があって、どれが決定的だというのはまだありません。私が当たっているのではないかと考えている理論は、「利益を得るのならば、代償を払わねばならない」というルール構造にすると正答率が上がるというものです。理論を提唱したコスミデス (Leda Cosmides) は、非常に紛らわしいのですが、社会契約理論と、自分の理論に名前をつけてます。

コスミデスは自分の理論を検証するために、なじみがないけれども、社会契約という意味ではなじみがあるような文脈を人々に提示して解いてもらったらどうなるか、ということをやりました。「利益を得るならば代償を払う」というルール構造には、皆さん多分なじみがあると思います。そんなことは普通にあるよと。お店に行ってお金を払うということでしょう。それはなじみがあるけれども、具体的な内容についてはちょっとなじみがないこと、例えば東南アジアのある島の村の話とかとってフィクションを仕立て上げて、A4 の紙にその村での決まりについて長々と書きます。具体的には、キャッサバの根というのは非常においしくて栄養豊富なもので、けれども非常に貴重なものである。さらに媚薬効果があって、これを食べた男に女は抗うことができないというふうに、此村ではなっていると説明します。もう一つ、モロナッツという食べ物があるのですが、これは普通のありふれた食材で簡単に手に入る。こういう 2 種類の食べ物があって、またこの村では結婚している男だけが顔に入れ墨を入れることができる、未婚の男は入れることができないという掟がある。そこで、「ある男がキャッサバの根を食べるならば、顔に入れ墨が無ければならない」というルールがこの村では決まっていますという説明文を延々と回答者に読んでもらうのです。そして 4 枚のカードの絵がかいてあります。ある男はキャッサバを食べている、ある男はモロナッツを食べている、ある男は入れ墨をしていて、ある男は入れ墨をしていません。「あなたは、男たちがルールを守っているかどうか調べるために、どのカードをめくって裏を調べる必要があると思いますか」と聞くと、ありがたいことに正答率が上がるということです (ここも図があれば)。

これがおもしろいのは、コスミデスはハーバードの学生で最初にやったのですが、その後、そんなのは市場主義の世界だけの話ではないかという批判があったらしいのです。腹を立てたコスミデスは——腹を立てたというのは私の想像ですけども——アマゾンの奥地に住んでいる Shiwiar という部族 (の村) にまで行ってこの問題をやりました。実際に行ったのはコスミデスではなくてその教え子のスギヤマ (Lawrence S. Sugiyama) さんという方です。それとコスミデスの夫のトゥービー (John Tooby) との 3 人の共同研究になります。

(Shiwiar は) ふだんは周りから隔離されているようなところに住んでいる方々です。もちろんこの人たちは文字を持たない社会です。Shiwiar 語と英語のバイリンガルが居ないので、問題文を英語からスペイン語に翻訳して、スペイン語から Shiwiar 語に翻訳する。それから Shiwiar 語のものを今度はまたスペイン語に別の人が翻訳し直して英語に翻訳し直して、それでちゃんと翻訳が合っているか確認したそうです。それぐらい産業化社会からは離れたところにいる人たちです。実際、ハーバードでやったように質問を文字に書いて見せるわけにいかないの、口で説明して、カードとしては表裏ではなくて上下にいろいろな情報が書いてあるようにして、それをふたをして隠すような形で見せて、めくると「PならばQ」の「Pならば」のところが上に書いてあって、Qのところが下に書いてある。1 枚ずつカードを見せて、この場合にはこれをめくる必要があるか (どうか) を聞いてやったそうです。

結果を見てみます。グラフの縦軸は何%の人がそのカードを選びましたかというものだと思います。Benefit Accepted というの、おいしくて媚薬効果のあるキャッサバの根を食べたということです。そのカードを選んだ人が、ハーバードの学生で 90%、Shiwiar の人で 90% 弱で同じである。Requirement not met というのは、必要な条件が満たされていない、つまり顔に入れ墨がない人というカードを選んだ人。それがどれぐらいかという、それぞれ非常に高いということです。

PならばQという言い方をしたときの not-Q に当たるカードは、この Wason 選択課題においてはすごく選択率が低いことが知られているものです。それが、Shiwar の人でもちゃんと選択率が上がるということです。右側の2枚は、それ以外のカードです。Benefit not accepted ですから、つまりキャッサバを食べていない、モロナッツを食べている人と結婚しているという人のところ。ここで Shiwar の人たちは、関係しない、別に調べなくてもいいようなカードも、ちょっとこれも調べておくかとめくってしまう傾向があったらしい。でも差を見れば、関係するもののほうを(大多数が)調べているということです。

これは解釈としては、恐らくはハーバードの学生も Shiwar も、結婚していないという、条件を満たしていないのに利益を手に入れているような「ずる (cheater)」というものは許さない。そういうやつはちゃんと見つけ出す必要があるというふうに考える歪みが、人間の脳みそ中にはあるのではないかと解釈がされています。

本当にそうなのか。そういうふうに、人間は「ずる」を見つける能力があるという考え方が一つですけれども、もう一つは、ここでいう社会契約のルールだと人間は論理的に考えることができるようになるのではないかと考える方もできるわけです。そこはどちらなのかということ調べてようとして反転型の課題をやります。

これは先ほど見せたそのままのものです。これを微妙に入れかえています(できれば図を)。何をやるかということ、「ある男がキャッサバの根を食べるならば、顔に入れ墨が無ければならない」というルールを「ある男の顔に入れ墨があるならば、キャッサバの根を食べる」というふうに、前後を入れかえるわけです。「食べてもよい」と書いてあると、条件文のPならばQとまた変わってくるのですが、あえてここを「食べる」と置いておくわけです。でも本当に人間がこういう場面では論理的に考えることができるようになっていなかったら、この場合には相変わらずPとnot-Qのカードを選ぶことになるということです。

ところがルールの前後を入れかえてしまうと、カードの論理的な意味も反転しますから、Pとnot-Qというのは、選ばれないだろうと予測される「入れ墨がある」と「モロナッツを食べている」の2枚になる。それよりもむしろ「入れ墨がない」に当たる not-P と、「キャッサバを食べている」にあたるQというカードの選択率が上がるのではないかと予測になるわけです。「ずる」を探しているのか論理的思考なのか、どちらなのかということがこれで調べられるだろうというのがコスミデスのロジックです。

これはちゃんと Shiwar とハーバードのデータがあります。反転型の場合に、「キャッサバの根を食べている」と「結婚していない、顔に入れ墨がない」というカードの選択率です。こちらのPとnot-Qという論理的な正答のほうはむしろ下がってしまうということです。ですからやはり人間はどうも、何かいいものをもらうのだったら代償を払わなければいけないというルールが与えられると、「ずるはいかんよ、ずるは」というふうに考える歪み、バイアスがあるらしいということがわかってきています。

ほかにもこの社会契約に関してはいろいろな研究があります。人間が「ずる探し」をしているというもう一つの根拠として、視点変化の効果というものものもあります。これは二者間で社会契約を考えます。ある工場で「休日働いたら、平日休暇を取れる」というルールを見せて、同じように Wason 課題をやります。「あなたは従業員だと思ってください。工場長(雇用者)がこのルールを守っているかどうかを調べてください」と言うと、この「休日に働いた」と「平日休暇を取っていない」の2枚を選びます。つまり、休日に出勤したのに平日に休暇をもらえなかった従業員はいないか、平日に休暇をもらわなかったのに実は休日働かされているやつがいなかったかということをチェックするわけです。工場長の「ずる」を見つけようとするとういうふうになります。

逆に、「あなたは工場のオーナーで、従業員たちが勝手に休みをとっていないかということ調べてようと思います」と言うと、「休日に働いていない」と「平日に休暇を取った」の2枚を選ぶ回答がふえる。これは、論理的には不正解である not-P とQのカードを選んでいることになります。休日働いていないのに平日に休んでいるやつとか、もう平日に休んでいるけれども実は休日もサボっているやつがいなかったかということ調べてようとする。それで、論理的に正しいカードが常に選ばれるのではなくて、「ずる」をしているかどうかということを見つけるほうで人間は考えるらしいという結論が導かれるわけです。社会的交換の論理と、とりあえず言っておきます。

ここまでのまとめですが、思考には歪みがあって、社会的交換にかんしての論理があるということがとりあえずお

わかりいただけましたかと思います。

社会契約以外にもほかにどんな契約というルールがあるのかということで、いろいろな研究がありますが、ここからは私の研究を紹介させてもらおうと思います。私が考えたのは、例えば集団内での分配に関する「契約」といったものです。先ほどまでの話を伺っていると、契約というよりは共同体の論理と言った方がよいのかもしれない。

私の実験では、二つのグループ—青グループと白グループ—があって、青グループのみんなで貯めたお金で鈴木さんが代表でビールを買いに行きましたというような文脈を、また延々と説明するわけです。そこで「青グループならば、ビールを飲んでよい」というルールを決めました。青グループのみんなのお金で買ったビールなのだから、青グループならばビールを飲んでよい。鈴木さんがビールを買ってきて、みんながビールをくれとわらわら集まっているけれども、「鈴木がちゃんとルールを守ってビールを配っているか調べてください、そのためにはどのカードをめくる必要がありますか」と聞くわけです。青グループの人 (P カード) と白グループの人 (not-P カード)、ビールをもらった人 (Q カード) とビールをもらえなかった人 (not-Q カード) という 4 人がいます。さて、どのカードを回答者は選ぶのでしょうか。

これをやるとこういう結果 (のグラフ) が出てきます。縦軸は各カードを選んだ回答者の割合 (選択率) です。真ん中の 2 枚のカードの選択率が非常に高くなります。日本と米国でデータをとっていますが、黄色が日本でピンクが米国のデータです。ほぼ同じパターンで、つまり外集団、青グループではない、白グループの人というカード (not-P カード) はすごくよく選びますし、ビールをもらったというカード (Q カード) をめくる人も多い。これは何を意味しているかということ、これは青グループのビールなのだから白グループのやつがビールをもらうのはいかんと。白グループのやつにビールをあげていないかということをチェックしようという傾向が、どうも人間の中にあるらしいということです。仮にこれを外集団排除の論理と私は呼んでいます。

この話自体は、皆さん結構ストンと理解できる話ではないかと思います。まあそうでしょう、人間そんなもんだよ、共同体を保護するような考え方やバイアスというのがあるよねと。ところがさっきの話と組み合わせると、ここで何か変な反転が起きていることに気づきます。外集団排除の論理は何かということ、「グループのメンバーならば、日本酒を飲んでよい」というルールですが、この場合にグループ外の人、つまり権利を持っていない人に利益を与えることがルール違反であると考えているわけです。何かをやっていない人に与えてしまうということ、許してはいけないと。

ところがコスミデスの社会的交換の論理は、例えばある人が「僕に 300 円払ったら僕の日本酒を飲んでよい」と言っていて日本酒を売っている状況を考えてときに、お金を払った人に日本酒を渡さなかったら、それは「ずる」であると考えるということです。

つまり、「外集団排除の論理」は外集団に対して too much generous に振る舞うことが許されなくて、「社会的交換の論理」の場合には、利益を持っている人に対して stingy に振る舞うことを許さないという、実は反転した論理です。ところがこの二つが人間の中にはごく普通に併存していることになるらしい。

それで、この話をコスミデス先生としたときに、ちょっと意地悪な問題を考えました。鈴木さんが今度はビールを売っています。「おれのビールを買わないか、1 杯 300 円だ」と言って売っている。そこに青グループのメンバーだけが、そして青グループのメンバー全員が鈴木さんに 300 円払いました。ところが白グループの人はだれもお金を払いませんでした。そこで鈴木さんはこう言うんですね。それじゃあ「青グループならば、ビールを飲んでよい」と。それでは、鈴木さんがルールを守っているかどうか調べましょう。

これは分配の状況と似ている。ルールだけを取り出せば分配の話のように見えるけれども、やっていることは交換ですよ。300 円とビールを、各個人が鈴木さんと個別に交換しているわけです。ところがその交換条件をグループの話であるかのように彩りを添えてやると、人間はどのように考えてしまうのか。

結果ですが、日米とも真ん中の 2 枚の選択率が高くなりました。社会的交換の論理で考えたら両端 (P カードと not-Q カード) の選択率が上がるはず。つまり、「お金を払った人に鈴木がビールを渡さないのはけしからんと考えるはずですが、そうではなくて「お金を払っていない白グループのやつに渡しちやいかん」と考えた回答者が多かった

ようなのです。

はじめの実験結果と並べてみると、ほとんど同じようなパターンが出てきています。つまり、外集団排除の論理というものがかかなり強烈に働くらしいということが見えてきます。

さらに、同じ実験の中でこういうことをやっています。実は日本での実験だけなのですが、今まで話した問題を1問目に解いてもらって、それから続けて、標準的な交換の問題にも回答して貰いました。これはさっきの工場の話と似たようなもので、日本なのでコンビニの話にしたのですが、「平日に働いたら、休日休暇を取れる」という交換のルールがあって、「皆さんはアルバイトの店員です。店長がこのルールを守っているかどうかをチェックしてください」という文脈でした。ですから、「分配」の問題を解いてから「コンビニ」を解く人と、「分配に見せかけた社会交換」を解いてから「コンビニ」を解く人がいたということです。

これまでの結果をおさらいすると、分配のときには、権利の無い人に与えることを許さない傾向がある。交換の時には、権利のある人に与えないことを許さない傾向がある。でも交換の話と分配の話のように見せかけると、権利の無い人に与えることを許さないようになる。

それでは、「分配」の問題を解いた人が、つづいて「交換」の問題を解くと、どう回答するか。「分配に見せかけた交換」の問題を解いた人が、つづいて「交換」の問題を解くと、どう回答するのか。それを見たわけです。

これは配付した資料をグラフに直しただけですが、少しわかりにくいですが結果だけを簡単にまとめて紹介します。左側のバーですが、1問目が分配のルールであったときに、ほかのグループにあげてはいけなんでしょうと回答する傾向と、2問目で店長が、本来休暇をもらえる人に与えないことがいかなんでしょうとチェックする傾向との間の関連性、相関係数を見たものです。相関が高いことがわかります。つまり純粋な分配状況を最初に見せられて、その後に純粋な交換状況を見せられると、最初では仲間以外のやつにあげちゃいけないよと考えた人ほど、2問目で、店長は休日に働いた人にちゃんと平日休みをあげなければいけないと思う傾向が強い。

ところが逆に、1問目で実は交換なんだけど分配に見せかけた問題を解いた人は、2問目の本当の交換のところで、店長が休暇を与えてしまうことをチェックする傾向が強くなります。つまり社会的交換の論理とは反対のパターンになるわけです。いつもだったら、ちゃんと働いた人みんなに休暇をあげなければいけないよと思っていた人たちが、どちらかという、働いていないやつに休暇を与えていたら、それはずるいじゃんよと考えるように、思考のモードが少し変わってしまう。1問目で一度、社会的交換を集団の論理で考えてしまうと、次の社会交換での論理が変化してしまうことがわかりました。

まとめると、歪みというのは文脈の影響を受けるということです。さらに、その歪みというのは過去の文脈の影響も受ける。一回、集団モードでの思考に入ると、その後に二者間での交換契約への思考が影響されるということがあるのではないかとということです。

時間がオーバーしつつあるので、個人差のところはごく簡単に紹介します。1問目の三段論法のところで、これは簡単にできる人もいますという言い方をしましたけれども、この能力には本当に個人差があることがわかっています。これは共同研究者と一緒に双子を対象にとったデータです。山ほど三段論法を解いてもらって、それも見開きのページを5分で解いてもらうというのが10ページぐらい続くという、問題を慶應大学の論理学教室の岡田先生のグループが開発されてまして、これを双子の方たちに解いていただきました。回答して下さった皆さん、本当にありがとうございましたと、改めて感謝申し上げます。

このグラフは分布図と我々は呼んでいます。縦軸が人数で、横軸が得点です。ゼロ点から100点の間で、例えば0～10点の人は何人かというグラフを書いていくと、大体真ん中あたりの人数が一番多くて、すごく得点の低い人とすごく得点の高い人というのは少ないという釣鐘の形のグラフが描けます。左が三段論法をたくさん解いてもらった点数の分布で、真ん中が言語的な知的な能力、単語の意味をよく知っているとかそういうものです。右が空間的な知的な能力です。知能テストで、紙を折って、ここを切って、それから開くとどうなりますか、というテストがありますが、ああいうものの得点分布です。そして三つとも大体似たような形になる。

似たような形になるだけでなく、これを双子のデータを使うとお互いの間にどういう関係があるのかというの

を見ることができます。AとかEというの(があつて)、Aというのは実は遺伝の影響です。三段論法テストの得点と、言語的な能力と空間的な能力というものには、全部に対して一般知能因子と我々と呼んでますが、一般的ないわゆる頭のよさというものが大体同じ70%ぐらいきいてくるといことがわかります。

つまり、いわゆる頭のよい人が、三段論法の推論にすぐれるということがわかるわけです。しかし一方で、普通の人がよく間違える共通したパターンというものもあります。それでは、ちょっと振り返って三段論法の推論における正答とは一体何なのかと考えると、実は頭のよい人が正答だと言っているものが正答ということになっているのではないかという疑問がでできます。合理性とは何かというような非常に複雑な話にもなってきます。

さらに、先ほどの分配のルールに関していうと、結果だけお見せしますけれども、これも私と共同研究者のデータですが、こんなこともわかっています。高信頼者、低信頼者と書いてあるのは何かというと、一般的信頼と言われていもので、世の中一般の人が大体どれぐらい信頼できるか、自分に悪意をなさないような人だと思っているかという傾向にうちて、そうした信頼感が高い人と低い人です。世の中は大体みんな信頼できると思っている人と、世の中は結構信頼できないやつばかりだと思っている人とで、分配ルールの Wason 課題に回答したときに、回答がどれぐらい違うかを見てみたものです。

そうすると、「外集団」(not-P カード)と「配分あり」(Q カード)の選択率差が出てきます。つまりほかのグループのやつにビールを分けてはいけなと考える傾向というのは、低信頼者のほうが高いんですね。世の中一般の人間は信頼できないと思っている人は、分配の状況が発生したときに外集団を排除する論理がより強く働くということが見られます。

さらに言えば、この一般信頼というものにも遺伝などがまたきいてきています。このAというものが遺伝の影響です。詳しく説明する時間はありませんが、パーソナリティを介した遺伝などが入ってきているということです。

(報告者の中で)時間を唯一オーバーして申しわけありませんが、最後に「素朴な問い」です。とりあえず今日はデータを羅列した感じで、データを見なれていない専門の方々にはまだ消化不良のところもあるかもしれません。要するに言いたいことは、人間の思考には歪みがあるということが、たくさんデータをとると見えてきてしまうということです。

Wason 課題の回答者には、こういうふうに答えるとお金がたくさんもらえとか、そういうインセンティブは一切働いていません。回答すること自体には、例えばこの課題に回答してくれる人にはクッキー・クーポンをあげるよとか、授業の単位をあげるよとか、そういう誘いはしていますけれども、どう回答したほうが自分に得かというインセンティブは一切働いていないわけです。これは私の解釈ですけども、ある意味、究極の中立的なルールに関する評価判断者と言えるのではないかと思います。こういうふう回答したほうが得するといことがないにもかかわらず、これだけの歪みが人間の中にはある。文脈依存性と個人差というものができてしまうということです。

今日は単純な、PならばQという条件文の話だけをしましたけれども、人間の思考にこういう歪みがあるとしたときに、ある契約やある言葉の意味というものを、客観的にこっちは正しいとか間違っているとか判断することは果たして可能なのだろうか。もしも可能だと言うのであれば、その根拠は一体何なのか。これがわからないと結構大変なことになるのではないか。

この間、博士論文をまとめるにあたって、内藤さんにこころ辺の話を質問して、裁判官がある法律を解釈するときはどういう根拠でやっているんでしょうねという話をしたら、そこには非常に複雑ないろいろな議論があるんですよと言われて、教科書を買って読んでみたら、非常に複雑なことがいろいろ書いてあったので、「非常に複雑なようである」と書いて引用だけしておしまいにしたんですけども。

そのときに、今日お話ししたような心理学的な視点を、法学の議論に取り込んでいくことは可能なのではないかと思います。こういう話題提供をさせていただきました。大変駆け足ではありましたが、ご清聴ありがとうございました。

藤本 平石先生ありがとうございました。実はそんなにはおくれていないのですが、平石先生に今すぐに確認しておきたい点は何かありますでしょうか。では、とりあえずご報告は以上ということで、平石先生、どうもありがとうございました。

ございました。